幼兒教育の方法（三）

東京女子高等師範學校附屬小學校主事　北澤種一

（八）

當時の學校の一般的教育に如何にこの自動教育が影響したかと言ふと其の頃の教育界は自由を重んじませんでした。然しながら又教育者達自身は自由が不足して束縛されて居る。卽ち先生の方から云へば束縛して居るのでありますが、其れにすら心付いてゐなかつたのであります。モンテッソリーの影響により自由の缺乏を氣付かせたのはモンテッソリー近代の功績であります。其の裏面にモンテッソリーは兒童に關する同情、觀察經驗及び心理學によつて尙ほ自動教育を考へて居つたのであります。幼兒は如何にも外部から働きを要する樣にして生れて來て居る。大人の保護がなければ成長も出來ない樣に哀れな狀態をして居ります。之れが子供の特徵であり、之れであるから子供で、子供は又かくあるべきものであります。然し社會的の一人である以上、社會に生存して居る以上、幼兒でも其の活動を制限される樣な束縛を脫する事は出來ないのであります。子供が保護を要求するのは子供の特權であり、この哀れな者を一人前にするにはどうしても自由を與へねばならないのであります。然し社會の一人である以上

思ふ程の自由を與へる事は出來ず、矢張り一定の束縛を受ける事は止むを得ないのであります。其の束縛はどういふ形で現れて來るかと言ひますと干渉となつて現れて來ます。子供を助け成長させるには干渉せねばならないのであります。教師が與へる言葉は子供にとつて干渉となるのでありますから、最も周到な用意が必要であります。社會的の束縛を少くする樣に干渉して行つたならば、子供に於ては自發活動となるのであります。然るに從來の教育は社會的の束縛を苦痛とするにかゝはらず、幼稚園小學校に於てはかうせねばならないと言ふ事の爲に束縛され、學校に於てよい子と言はれる子供は其の干渉を上手に切り拔けたものに過ぎないのであります。學校に於てよい子であつて先生の受けのよかつたものが、社會に立つてから案外役に立たず自由な大きい仕事に就いて活動する事が出來ないのでありこれに反して學校に於ては亂暴者として先生の鞭の的となつて居た者が大事業を起す事があるのであります。學校で干渉が多くありすぎると前例の樣な事になるのでありまして幼稚園に於て社會的干渉のより少い幼稚園がよい幼稚園であります。社會的束縛の一つである秩序を守らねばならぬ事は其の時其の幼兒には其の年齡に適當した秩序を守らせる事が必要であります。卽ち理窟にあつた合理的の干渉はまだよいとして、不合理な干渉はどうしてもさけなければなりません。モンテッソリーが此の合理的干渉と言ふ事に力を置いた事は彼の保姆を養成した其の仕方を見ても分る事であります。モンテッソリーの保姆實習の方法を見ますると、保姆の候補者は幼兒が何かして居る場合に何か干渉しなければならない事が起

つて來ます。其の際に其れに適當な干渉を行ふのでありますが、其の際の干渉がモンテッソリーがこの場合には此の干渉がよいと考へる、其の考へて居る事とぴつたり合はなければなりません。いつもモンテッソリーの干渉と實習生の干渉とが一致するまでは何年たつても免許狀を受ける事は出來ないのであります。卽ち自分で考へて見て行つた干渉が合理的になるのでなければならないのであります。このモンテッソリーの保姆實習科を出た保姆の居る幼稚園は一見して其れと分る程自由な中にきちつとした所を見出されるのでありました。自發活動があらはれて來ると、其處に自發活動のみならず直ちに天性が現れて來ます。之の天性はフレーベル、ルソーが唱へた事でありますが、何が天性であるかは分らないのであります、モンテッソリーの考へでは今幼兒のして居る事は皆天性の現れである。社會的の干渉のない場合に現れたものが卽ち子供の天性であつて具體的事實的な現れであります。その一番始には幼兒を獨立の狀態に置く事が必要であります。不合理的の干渉をされぬ、不合理的の依賴をせぬ、この二つの條件があればこれは獨立の型であります。こういふ結論に至つたといふ事はモンテッソリー氏の直觀と心理學の研究によるものであります。そして彼が人間の興味に突進して體驗する事につとめたるにもよるのであります。子供を理解するといふ事は、子供に對して自己の內面的意識を覺醒する事であります。物を與へた時に子供が興味を引き起して興味を持て之れを見て後理解するといふ事は考へられるのであります。モンテッソリーの言葉で言ひますならば、內面的の意識を呼びさます事であります。こゝ

に果物の木があります。子供はこれを觀察して栗だと知る事が出來ます。知る事は説明を得て知つたのであります。この栗は幼稚園の御室の傍の栗の木で、花が咲き次第に花が散り實になり其の實が大きくなつて落ちたのだといふ樣に毎日彼らの體驗からだん〳〵之れが理解し得られる樣になるのであります。栗を理解したといふ事は栗に對して子供が內面的意識を覺醒したるによるのであります。內面的意識は人の言葉を反復し得るといふ樣なのではありません。その樣なのは智であります。智には興味も體驗もない説明的の理解が多いものであります。

（九）

次に近頃モンテッソリーが新しく唱へ出した事に冥想思辨といふ事があります。この冥想といふ働きはモンテッソリーの説の中で、最も東洋的であり東洋人がよく之れを行ひ得る事であるといつて居ります。一體に東洋人は西洋人に比較して見ました時に東洋人は物を總合して見る傾向があり、西洋人は科學的分解的に物を見て一部分から全體をおしはからうとするのであります。でありますから科學分解的でない冥想にふけると言ふ樣な事は總合的に漠然と考へる東洋人に適して居るのであります。冥想とは內面的意識を覺醒する事であります。從來は外界から受け取つた物に對して如何に反應するかとのみ考へて來ましたが其れに反して我々が內面的意識により事を行ふと考へたのは新しい考へ方であります。電燈を見てこれは電燈であるといふ事は反射的に知つて來たのであります。電燈を見て更に理解の働く

のみでなく全體の精神を以てそれに對し內面的に之れを考へるならば之れは內面的意識が覺醒し働いたのであります。幼兒は內面的意識の豐富な所有者であつて、よく之を起す事が出來るものであります。即ち全體的の態度を持つて之にたいする事が出來るものでありまして、幼兒でも內面的な態度を持ち得るものであります。從來の考へでは幼兒は外界の物に對して理解する事が出來得るのみであつて、モンテッソリーの言ふ樣な內面的意識といふ樣な事にはふれずに置かれた問題であります。西洋人は又內面的意識を起す事は東洋人のみであつて西洋人は發達して居ないものであると考へて居りましたけれ共、然し行ひ得る事であります。モンテッソリー敎育法の結果自發活動といふ事を考へる樣になり、子供の天性を具體的に考へたり子供の內面的意識といふ樣な事も考へられる樣になつて來た。我々は冥想及び思辯なしには各々の個人製作といふものに從ふ事は出來ないのであります。何故かと言ひますと、この冥想思辨に依り、または內面的に於て反復し循還して居らなければ長い間の作業は續かない物であります。今まで子供は何故比較的長時間其の事を行ひ得るかといふ事が不思議がられて居りましたが考へるだけで少しも理解されて居りませんでした。それは幼兒に豐富な冥想思辨があるからであります。故に我々は先づ其の冥想思辨、即ち幼兒の持つそれに對して體驗し理解してやらなければならないのであります。然して思辨により人間が本當に成熟し得られたるものであります。成熟とは一般の知識や概念を出來るだけ頭の中につめ込む事と考へて居りまして、智情を總括　てこれが完全に出來て居ればそれで

人間が成熟し得られるものと考へて居りましたのは古い考へ方があります。もし本當にそうでしたならば人間は結込んだものをはき出す所の一つの道具に過ぎないでありませう。牛肉屋のひき肉の器械の樣に智能が豐富にされて色々の物をつめ込むで、其れを端から出して行く高等な機械であります。然し此處に冥想思辨があつて智を支配するものであるならば、即ち人間であります。思辨を作つて無限に續く人世の第一歩に踏み出させなければならないのであります。故にモンテッソリーは單なる幼兒に與ふる玩具にしても唯玩具を與へればよいと言ふのではなくて、其處に冥想等が伴はなければならないとして居ります。玩具の目的は自己を訂正する事にあるのであつて、子供の周圍、子供の世界の進むに從つて子供の意識を喚起するは極めて必要な事であります。その玩具に用ひられてある材料に對する注意を拂ふと言ふ意識を內面的に恢復せしめるものであります。積木の木といふものの性質を考へて之れをよく理解すること、全體の精神の力を通じて用ひてある材料の智識を得る事が出來るのであります。之によつて子供自身の內面的指導が鋭敏に認められるのであります。

（一〇）

最後に自身を人格の上に統禦せしめる事が必要であります。かうなるに於て始めて自由を與へた最後の目的を達する事が出來るのであります、一部分一部分の我といふものに基いて後全體的に築上げ、人格的に立派なものとならなければなりません。もしも不合理な干涉をし不合理な依賴をさせたならば、

其の子供は到底完全な發達は出來ません。不合理な干渉に對して幼兒が之に順應して行かなければならないとなると、自分の力を外に曲げなければならないのであります。之れが幼兒の力の足りない所でありまして、外界の保護を受けねばならない所であります。

現代の全體を通じて眞直に人格を立てなければならないのであります、モンテッソリー女史が世界に貢献した事を言つて見ますと、從來の敎育が厭世的の敎育であり束縛された敎育でありましたのに、彼は自動敎育を說いて大いに自由を主張したのであります。自己敎育とは自分の冥想の上に、外界から受けたものを取つては自分を助長して延ばして行くのであります。從來の大學者等はこの樣な理論的な主張はしたのでありますけれ共成功しなかつたのであります。しかしモンテッソリーはこれを理論でなしに事實に於て行つた爲に成功したのであります。從來の社會に行はれた樣な强い無理等が行はれる樣な事はなく、自由に自動的にすることにつとめたのであります。こゝに一つ注意しなければならない事は單にモンテッソリーのみを幼兒の敎育に對する完全なものとする事は出來ません。英國に於てはモンテッソリーを尊重し其後かれの弟子を得て幼稚園を行つて行きたいと考へて居る位のでありますが然し我が國等に於てはこの二大女性の說をそのまゝに使用しても到底滿足した十分な保育は出來ないのであります。よく長所を取り短所を棄てゝ其の上に自分々々の研究した事觀察した事を加へて行かなければなりません。そして幼兒に對する熱烈な愛情により堅い信仰に依り、幼兒をよく觀察し理解して保育を行つ

て行かなければならないと思ふのであります。又現代他の教育上の運動と同樣に、綠色改造運動といふのが幼兒教育の上にも及んで參りました。こゝに少しその御話しをし樣と思ひます。それは綠色改造運動でありますから、其の名前の通り綠色を尊ぶ運動であります。英國は正に今文明の弊として國民の體育は日一日とたいはいしつゝあるのであります。綠色とは自然のことであります。何故ならば自然は大きな綠色の世界でありますからその頽廢しつゝある國民の體力、精神といふ樣なものを皆自然にもどさうとして居るのであります。煉瓦でかためた校舍、鐵を以て作られた家が皆幼兒に大きな害を與へて幼兒の小さい體をさいなまうとしつつあるのでありますが故に、子供は出來得る限り綠色の世界に出して、即ち庭に出し郊外に出して綠色に接しさせなければならないのであります。日中外の光線に接せず綠色に接しないものは實に身體に害であり幼稚園の目的に反したものであるといふ考へであります。世の中が進步するに從ひそれに附屬して色々の學說等は限りなく生れて來るものでありますが、我々は新說に惑はされる事なく、常に心を幼兒の上に置き、それを適用する事が幼兒に對する幸か不幸かを考へて行かなければなりません。そしてあふるゝばかりの愛情を以つてよく幼兒と同じ心になり保育して行く事が最も必要な事であります。色々の方面から御話を申上げ一つもまとまつた事を申上げなかつた事を申譯なく存じますが、然し皆樣の心に何物かひゞくものがありますれば何より幸と思ふのであります。

（文責記者）（終）